

ぶん、おまえの仲間かい



③左奥にいるサギの様子をうかがうキツネ
④サギに威嚇されたのか、慌てて逃げる。いずれも愛知県大府市の長草大池で(金井宣夫さん提供)

愛知県の知多半島最北部に位置する大府市で、地元のカメラ愛好家が野生のキツネを撮影することに成功した。市内では長く姿を消していたが、名古屋など都市部の隣接地域で確認できたことに、専門家は「半島全体の生息数が回復しつつあるのでは」と推測。童話「ぶんぎつね」の舞台となった半島での再生と共生に期待している。

(栗山真寛)

愛知・大府でカメラ愛好家 昨秋撮影



撮影したのは大府市長草町の金井宣夫さん(86)。昨年十月二十九日午前六時四十分ごろ、知多半島道路西側の長草大池で野鳥を撮影中、百五十ほど離れた対岸の森から動物が出てくるのに気付いた。「野犬かな」と思いつつ、超望遠レンズで撮影した。帰宅後、パソコンの画面で拡大すると、キツネのようにも見えたが、確信は持てなかった。以後、何度も



同じ場所に足を運んだが、撮影できたのはこの日だけだった。

一方、本紙は昨年十一月二十一日付朝刊で、知多半島の野生キツネが大規模太陽光発電所(メガソーラー)をねぐらにしていると報道。日本福祉大の福田秀志教授(森林保護学)らが二〇一九年から一年、一年半にわたり、二匹のキツネに衛星利用測位システム(GPS)発信機付きの首輪をつけて追跡調査したところ、常滑、半田、知多、東海の四市と阿久比町で行動していたことが分かったと伝えた。

この記事を見た金井さんは「半田や阿久比のキツネを撮影した金井宣夫さん

専門家「知多半島の生息数回復しつつある」

が大府までやってきたのかも」と推測。本紙に連絡があり、福田教授に写真を見せてもらうと「しっぽの形から分かる」と、キツネだと断定した。

大府市内では〇三年九月、車と接触したとみられるキツネが保護されたとの本紙報道があるが、それ以降は見当たらない。当時から一生涯で保護されたのは極めて珍しい」と紹介。福田教授は「半島北部は個体数が少なく、その後も発見されない期間が長かった」と話す。

今回の撮影は、キツネが縄張り内で行動する時期にあたるため「池の周りの雑木林、休耕地、草地を含めた一帯をねぐらとし、半径一〜二キロを行動範囲として生活していると推察される」と説明する。

知多半島のキツネは、開発が進んだ一九六〇年代に姿を消したが、森林が多い半島南部で九〇年代後半に再び散見されるようになった。徐々に北上しているとみられ、福田教授は「今回の発見で、ついに半島最北部に縄張りができた可能性がある」と期待。半島全体で個体数が回復しつつあるとみている。

福田教授の話聞いた金井さんは「撮影後に見かけなくなったのは、発情期で遠出したのかな。平穩に暮らしてもらいたい」と話している。